

将来への提言

第 21 回インカレ実行委員会

現在、6つの地区学連のうち4つまでか、かなり加盟校数の少ない状態にある。中九四学連もそのような地区学連の一つであるが、「秋吉台」というすばらしいトレインでインカレを開きたいという地元 OB の熱意により、このインカレが開かれた。インカレ運営を経験したものが少ない状況だったが、地元地域クラブの方や関西地区の方の多大な強力があって無事開催することができた。

多くの加盟員にとって山口は遠隔地である。加盟員数の減少もあり、実行委員会には 800 人ぐらいしか参加が見込めないかもしれないと言危惧があった。そのため、のぼりやポスターなどにより積極的な宣伝活動を行った。トレイン風景の写真や会場名も公開し、山口インカレのイメージを持ってもらえるようにした。このような広報の効果があったのか、学生の申込者は 1000 人をこえた。また、一般併設大会でもクラシック選手権のコースを翌日走るクラスなど、参加者に魅力のある大会にしようと努力し、結果として多くの人に秋吉台を楽しんでもらえたと思う。このような参加者を増やす努力は、インカレの財政を安定化するためにも、今後必要だと思う。

インカレの宣伝活動を活発にすると、公式文書の伝達手段以外に実行委員会から参加者に情報提供をすることになる。参加者が必ず読むべき「要項」と、「直前合宿に便利な宿泊施設」や「モデルイベントトレインの風景」のような積極的に知ろうとした時に得になる情報を区別し、後者については積極的に情報提供すればよい。大会会場での掲示やインターネットでの情報提供に関して、もし学生が不公平だと感じるなら、臨機応変な情報伝達の手段について、学連全体で考えてもらいたい。

インカレの参加者の 8 割は一般クラスを走る。高い参加費を払い遠くまで来て、一般クラスだったからつまらなかったとは言われたくなかった。選手権のレグと一般クラスのレグを直角にクロスさせるなど工夫して、できるだけ充実したコースにした。今後も、一般クラスを軽視せずにインカレ参加者全員に満足してもらえる大会を開いてもらいたい。実行委員会として苦労した点の一つに、大会運営の基本的な事項をまとめたマニュアルがなかった点があげられる。毎年インカレで引き継がれているマニュアルは、それぞれの大会の特殊事情を反映している部分も多く、そのまま今回の大会に適用するわけにはいかない。大会運の共通部分を抽出した基本的なマニュアルがあれば、インカレの地方開催はもとより、大学大会の通営などにも重宝するであろう。日本学連の事業として、マニュアル集づくりをしてみたらどうだろうか。